

日新館童子訓は、会津藩の藩主（五代容頌公）が編纂した「道」「徳」の書です。つまり、「会津藩の武士の子どもたちがいかにあるべきかを書いた生活の手引書」であつたといえます。

当時の封建社会（幕藩体制）を支えることを目的としたことは否めませんが、そうした時代背景を超えて、「人として」「武士として」「守らねばならない永遠の「こころ」「心構え」「礼節」が、数多く説かれていた名著であると思います。

上下二巻五十三章からなり、まず、「人としての教え、考え方（忠・孝・悌・敬・信）」を説き、次に、その「原文」にあたる文節を挙げ、最後に「古今の実話」という構成を成していました。日新館教育の要を成す教育書といえます。

今回の『会津これからの童子訓』においてもその形を崩さずに載せたほうが良かったかもしれませんが、敢えて、説明文の一部分を通読できるように編集しました。これは皆さんに素読（意味や解釈はともかくとして、声を出して読む）をして欲しいという願いからです。どうぞ、折に触れて、この「教え 説明編」を通読して下さい。できれば、親子揃って、声を出して下下さい。当時の日新館に入学した十歳前後の子どもたちが、まず、勉強する方法は素読でした。

今の時代に似合わない事柄もあるかもしれませんが、それでもとにかく、通読してみてください。理論や理屈を超えた「人としての道」を感じ取って頂けるはずですよ。

青少年の皆さんには、自分自身の「道徳の書」として、ご父兄の皆様には、「躰教育の書」としてご愛読頂ければと思います。